

平成2年7月5日

厚生大臣 津島 雄二 殿

財団設立趣意書

財団法人 コスメトロジー研究振興財団

設立者 小林孝三郎

我が国の化粧品に関連する科学技術の進歩はめざましく、今や皮膚科学や健康、衛生の分野からバイオテクノロジーやライフサイエンスという科学技術の最先端にまでまたがっています。

化粧品の役割・機能も、単に皮膚を清潔に保ったり、身だしなみとしての粧いということから、自己表現とか心の充足といった方向へのウェイトが高まりつつあります。

一方、「日本の将来推計人口」によると、60才以上の高齢者が年々増加し、20年後には現在の倍となり、総人口の30%を占めるといわれています。産業の各分野や諸研究機関において高齢化社会への対応が検討されており、化粧品分野においても老化機構の研究、皮膚生理機能の解明による皮膚恒常性（ホメオスターシス）、安全性等に関する調査・研究がなされています。

現在、経済大国日本はかつてない繁栄期にあります。真に豊かな国民生活を実現していくためには、心の豊かさを大切にしていくことが必要であり、また、今後本格的高齢化社会の到来を迎え、国民のそれぞれが心身ともに健全で、長い人生を生きがいを持って暮らしていけることが何よりも重要になってきています。

したがって、このような国民の意識の変化や高齢化に対応し、国民の生活を美しく豊かなものとしていく化粧品学の研究を積極的に振興していくことは、大きな意義を持つと考えられ、化粧品学に関する調査・研究及びその助成等を行う当財団を設立することにより広く国民の保健、衛生の向上を図り、美しく豊かな人間生活の実現に寄与したいと考えています。

なお、化粧品学とは、化粧品について、保健、衛生確保の立場にたちつつ、安全、環境、心理、社会などの側面について、関連科学を動員した学際的な研究を行い、人々の豊かな生活に寄与する化粧品の姿、あり方を明らかにしていく学問であります。その振興の必要性の詳細については次のとおりです。

1. 化粧品とは

化粧品は、日用品の中でも特に人間の体や生活に密着したものです。しかし、一般には、口紅やおしろいのようなメーキャップ用のものだけが、化粧品であると認識され、あっても無くてもよいものだと誤解されている面があります。

風呂で使う石鹸やシャンプー、髪を整えるリキッド、ムース、手や顔に塗るクリームなど、特に意識して化粧品を使っているというわけではありませんが、それと気が付かないで、一日に何度もお世話になっているものがあります。あまりに生活に密着しているためその重要性に気付いていませんが、もし、身の回りからすべての化粧品が無くなってしまったら、いかに困ることか気付くことになるでしょう。

人間は生まれたらすぐに産湯の沫溶剤やベビーオイルのお世話になり、死化粧に至るまで、化粧品とは一生の間付き合うこととなります。

未開の人類においても、顔や体に色を塗ることは盛んであり、人類の歴史が始まって以来化粧品はこの世に存在しているものであります。動物も見繕いはしますが、化粧品は使いません。これは、人間固有の文化であります。

化粧品は日本だけでも年間1兆3千億円の生産があり、世界中では年間5兆円以上の化粧品が生産されています。これは医療用具の生産金額に匹敵するものであり、産業としても相当大きなものとなっています。

2. 化粧品の効果と役割

美しくメーキャップしたり、シワを際したり、髪の毛を整えたりすることはもちろんですが、化粧品には皮膚や粘膜を清潔に保ち、また、油の皮膜により皮膚を外界から保護するというような医学的に重要な効果もあります。

特に女性については、化粧をするという行為が生活のリズムの中に組み込まれており、毎朝の化粧をしなくなったら、痴呆が始まったことのメルクマールともされており、生活そのものの一部ともなっています。

化粧をするということは、単に外面を飾ることではなく、人に見せなくても、化粧しているだけで自分自身の気持ちちが和らいだり、落ち着きを取り戻せたりすることもあります。最近では、入院中の患者も化粧したり、また、化粧することが認められたりしており、化粧によって心が明るくなり、病気の治療にも大いに役立っています。

このように、化粧には、単に外面を飾るだけでなく、もっと奥深い人間の心に影響を与える力があります。したがって、使い方が悪かったり、質の悪い製品が使われた場合には、皮膚そのもののみならず、人間の心にも悪い影響を与えることになります。

3. 化粧品研究の現況

化粧品の原料は約3千種類、化粧品の製品は日本だけでも毎年約3万品目が製造、輸入されており、新しい成分、新しい形態も次々と導入されてきています。化粧品については、化学、物理学を始め生理学、色彩学、心理学など医薬品以上に広い分野の学問が複雑に關

連していますが、中心となるべき理論が体系化されていないため、個別分野においても十分な研究が行われていません。民間の化粧品メーカーで部分的に行われている程度であり、大学などの学問の場において、あまり取り上げられてもいません。

4. 化粧品学振興の必要性

近年、国民の価値観は、物の豊かさから心の豊かさへと変化してきています。

一方、高齢化社会を迎え、いかに長い人生を生きがいを持って健やかに過ごせるかが重要な問題となってきています。その前提として十分な医療を確保することは当然としても、さらに一歩進んで人々にゆとり、やすらぎ、生きがい等を与え、心の充足が得られるような「もの」の確保が重要となるでしょう。例えば、高齢者が白髪を染めることによって、単に外観だけでなく気持ちも若返り、外出したり社会活動を始めたりするようになる、ファンデーションを利用して顔面のシミを隠すことにより、人前に出ることを鷹暑しなくなり、交友活動が積極的になって楽しい生活が送れるようになる等のケースもあります。外出して他人に見せるためだけでなく自宅にいる時でも、肌を整え、髪をとかして、化粧することで、あるいは化粧した自分の姿を鏡で見ることにより、美しい洋服をきたり、気に入ってるアクセサリーをつけた時のように、何となく、安心感、満足感を覚え、鬱いでいた気持ちちが治ることもよくあることです。

また、化粧品の需要の増大に対応して様々なタイプの化粧品が市販されてきていますが、新素材や複雑な製法が使われており、それらが人々の身体や精神面にどのような影響を与えるかよく分かっていないケースも多くなっています。

化粧品は直接人体に用いられるものですから、その保健、衛生の確保が最も基本であることは言うまでもありません。したがって、このような観点に立脚しつつ、化粧品について、安全、環境、心理、社会などの側面について関連化学を動員した学際的な研究を行い、人々の豊かな生活に寄与する化粧品の姿、あり方を明らかにしていく必要があります。

具体的には、化粧品の果たす役割機能、社会的意義の研究、皮膚生理のメカニズムと加齢の関係、色彩や香りの効果による心理的作用などの研究をもとに美しく豊かな人間生活を送るために役立つ、化粧品学の体系を整えていくこととなります。また、化粧品の安全性の問題は将来にわたっても極めて重要なものですが、安全生の評価方法の検討や、そのための動物実験の代替法の研究なども併せて行っていく必要があります。